

---

**東方炎貝時** ~ The shellfish of the sky.

リョク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方炎貝時々 The shelfish of the sky.

### 【ZEPONE】

Z 8 6 3 5 Y

### 【作者名】

リヨク

### 【あらすじ】

未来での戦いも終わり過去に戻る事となつた沢田綱吉。だが着いた場所は幻想郷！？

幻想入り来る！

ようやく……終れるんだ！！！

過去に帰れるんだ！！！

俺、沢田綱吉はそう思っていた。  
本当に……あんな事になるなんて……」れっぽっちも思つていなかつたんだ。

「…………」「何處ーーーー？」

現れた場所は何の変哲も無い異常に長いだけのただの階段。  
しかも現れた場所が悪かったのか足を踏み外しそのまま下まで転がり落ちた。

「いつてーツ…………？」

これは流石に痛い、うん痛いッ！  
見てるだけで痛くなつてくる！－

「いつてーー！すげー痛い！－！」

体中に激痛が走る。そしてすぐに收まり、上を、階段を見上げた。  
沢田綱吉、通称ツナは階段を見てた。

「長ツー！－！」

ここでも突っ込みを入れる、つまりそれだけ長いと言つことだ。  
「・・・・・登つた方が良いかな？」

ツナの持つ技能『超直感』<sup>スキル</sup>がこの階段を登つた方が良いとつげていた。仕方なく『超直感』に従い、そのまま登る事となつた。

3

それから三時間後・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・いつになつたら着くんだよ」

・・・・・・・・・・・・さすがに歩き疲れたのか、少しやさぐれてきて  
いる。

すでに明るかつた空は暗くなり、星が出ていた。

その星空はとても美しく、都会じゃあまず見られないほど神秘的だ  
つた。

「・・・・・・・・・・・・綺麗だ・・・・・・」

ツナは無意識の内に呴いていた。いきなり一人でこの世界に投げ出され、仲間もおらず、心細かつた筈だがその美しさに見とれていたのだ。

・・・グルルルツ！

いきなり響いた獣の唸り声・・・・・・・・・・・。

ツナは唸り声を聞くと服の内側から手袋と薬を取り出した、若干震えていたが・・・・・・。

階段の両幅は深い森になつてゐる、これではさつき迄の美しかつた夜空は今では不気味にしか感じないだろう。

右の森ががさがさと音を立てて揺れる・・・・・・・・。

ツナの体に緊張が走る。

そして森から獣が現れた。  
獣の正体は熊だった。

「なつ！？」「

ツナは声をあげた。

ツナが声をあげたのと同時に熊は走り出し、ツナを体当たりでブツ飛ばした。

ツナはそのままハサウエーにさわ木は立たる  
その木は簡単はへし折れ  
砂煙をあげる。

普段のツナならこんな事にはならない。

すぐさま逃げ出すだろ？

だがツナは逃げなかつた、正確には動搖して隙を作りそこをつかこまれ、攻撃されたのだ。

何故動搖したか？

それは熊の目が三つあつたからだ！

それだけでなく体も普通の熊に比べて三倍の大きさ、毛並みも赤く綺麗に生え揃つた歯は明らかに血がベットリと塗られていた。熊は本当にただの熊ではなかつたのだ。

そして熊はぶつ飛ばした人間に喰おうとしたトドメをさしに煙が舞い上がりつてる場所に向かつた。

だが彼も普通の人間ではない。

煙が上がつている場所に淡く光る橙色の炎が突如表れた。  
そして炎を纏つた拳がいとも簡単に熊を殴り飛ばした。

「…………」

煙から出てきたのは額に炎を燈した沢田綱吉だつた。

『ハイパー死ぬ氣モード超死ぬ氣化』自らの潜在能力、リミニッターを外し内面的感覚である超直感等の感覚を上げ生命エネルギーである死ぬ気の炎を放する状態…………。

ドーピングみたいなものではあるがあくまでも自身が鍛えてこそ意味があるものだ。

「普通に倒すつもりだつたんだが」

ツナは目の前の熊を見据えた。

真にまたビンの上にいた。たが先にビンの捕食者としての顔は無い……今は戦う顔だった。

「死ぬ気の炎じやない？」

**熊はツナに襲い掛かる！！**

だかツナはそれを右手のグローブで防ぎ熊の腹に拳を決めた。

卷之三

「…………なんだつたんだ？今の力は…………」

ツナは少しだけ右手を庇いながら呟いた。

熊との戦いでツナは右手で防いだがその衝撃で右腕がいかれたのだ。単純に防いだように見えたが完全に守れたのはイクスグローブだけでその衝撃は完全に響いていたのだ。

ツナは上を見て  
.....

「…………」そのままだつたら空を飛んだほうが早いな

そう呟いた。

炎の推進力で空を飛んだが右手がまだ治つていなかつた為変な方に飛んだりしたが何とか上にたどり着く事が出来た。

「…………疲れた～ツ！…！」

ツナは超死ぬ氣化ハイパー死ぬ気モードを解き息を吐いた。

右手は少しだが動いていた、治り始めてきているのだらう。そしてツナは目の前にある建物を見た。

それは…………

「神社？」

それは神社だつた、だが小さかつた。

あくまで神社としての広さで住居としては申し分が無かつた。

「…………神社だから取り合えずお金を…………」

誰もがする行動をする。

「…………三百円しかない…………」

なげなしの三百円、過去のツナの世界ならまだしも未来で得たなげなしの三百円…………

それを賽銭箱に入れる。

「ゴト！」

明らかに何も入つてない空っぽの音が響いた。

卷之三

流石のツナも何も言わなくなつてしまつた。ツナは取り合えず座らうとしたが

お賽錢.....！」

神社から出てきたのは白い着物を着た少女だった。明らかに今寝ようとしていたと言う感じだった。

「三百円入つてる……」

少しだけ嬉しそうに賽銭箱から三百円を取る。

「……………ありがとうございます」

少女はそう言つと、頭を下げる。

「あ、うん……どういたしまして」

ツナも頭を下げる。

「えつと、ここ何処なんですか？」

ツナは早く元の並森に戻りたいがために少女に聞く。

「外来人……」

少女はそう呟いた。

「へ？ 今何で」

「まあ良いわ、中に入りなさい……話はそこで聞くから」

そう言って少女はツナを神社に招きいれた。

「人と妖怪が住まう地ーーーーー？」

「うるさいわよーーーー！」

「うめんなさいーーーー！」

少女、博麗靈夢は頭を抱えていた。  
それはツナが原因である。

「普通の神隠しならまだしも時間旅行中にここに流れ着くって……  
私の力で返す事出来ないじゃない！！」

「…………」めんなさい

この二人は互いの事を話した。

靈夢は幻想郷、神隠し、妖怪の事を、ツナは十年バズーカで未来に行き戦つた事を……。ツナはだいぶ省略しているが……話せるといひ今までなら話した。

「まあ良いわ、暫く泊まりなさい」

「え？ 良いの！？」

ツナは靈夢の言葉を聞いた。

「まあアンタからはお賽銭貰つてゐしそれくらいはしないことね」

こうして、ボンゴレ十代目沢田綱吉の幻想入りが始まった。

## 死ぬ氣の炎

空をかけるのは巨大な龍……

「で、でかー！……？」

それに反応する一人の人間……  
龍は吼える、それだけで大気が軋むほど……  
そして龍には一本の剣が刺さっていた。

「…………夢か……」

ツナは目を覚ました、寝ていた場所は少し狭いだけの和室だった。

「なんだつたんだ？あの夢…………」

ツナは取り合えず布団から起き、顔を洗う為に部屋から出た。  
そのまま外にある井戸に向かう。

「うへ、さむ…………」

外の気温は寒く、枯葉が目立っていた。  
すでに11月……寒いのはしょうがないはずだ、しかもここ  
は暖房などの器具が無いのだ。

ツナは井戸水を汲み、そのまま手で掬つ……。  
そして顔につけた。

「…………つめたツ！…！」

井戸水は冷たくツナの肌を刺す。  
その冷たさに耐えながら顔を洗い、タオルで顔を拭く。

「おはよー」

ツナが顔を洗い終わつたと同時に靈夢が裸を開け現れた。  
そして白い着物が少しだけ肌蹴ていた……初心なツナはそれに顔  
を真赤にする。

「ちょ！服肌蹴てる！…！」

「私も顔洗うからじいで」

ツナの説得も通じず靈夢がツナを押しのけて井戸水に手を突っ込んだ。

「…………つめたツ！…！」

「これまた同じ反応をした。」

「もぐもぐ」

「むぐむぐ」

靈夢とツナは朝食の焼き魚を食べていた。  
だがツナは顔を真赤にしていた。

今の靈夢の姿は赤と白の脇が無い巫女服とセーラー服を混ぜ合わせたかの様な物だった。

それにツナは会った時は夜で暗かつた為顔を良く見ていなかったのだ。

靈夢の容姿はかなりの美少女だ、それを見て顔を真赤にするツナは悪くない。

そして一人は食べ終わり、少しだけ時間が過ぎた。

「じゃあ行くわよ」

唐突に靈夢が言つた。

「何処に行くんだよ…………」

「香霖堂よ、色々な物が売ってるわ」

その後に「服も買わないといけないだらうしね」と付け加えた。その言葉にツナも納得した。

「じゃあ行くわよ」

靈夢は空を飛んだ。……。

「何で空飛べるの！？！」

「あ、そういうや蒽タ外来人だつたわね」

靈夢はそう言つて戻つてきた。

「いや、空は飛べるんだけど…………」

「なり叶へしなせ」

「わ、分かつたよ」

そう言つて手袋を着け、死ぬ氣丸を飲む。額から炎を出し、オレンジ色の瞳になる。

「行くぞ」

「何で性格が変わるのよ。」

明らかに性格が変わったよつたシナに靈夢も驚愕する。……。

「まあ良二わ……………じやあ行くわー」

そう言つて一人は博麗神社から飛び去る。

ツナは死ぬ気の炎を消し、目の前にある店を見た。

「一九一〇年が香霖堂よ」

「…………こんな所に人が来るの？」

「めったに来ないわよ」

香霖堂は魔法の森の中にあるため滅多に人間の客は来ない。妖怪ですらあんまり来ないのだ。

# 「居るー？霖之助さん」

靈夢は扉を開け、店の中に入る。

中には白い髪をした眼鏡の美青年が居た。

「……ああ、靈夢か……」

青年は靈夢を見ると返事をした。

「後ろの君は?」

「あ、俺……いや僕は沢田綱吉です」

「別に良いよ、僕は森近霖之助だよ、よろしくね綱吉君」

「え、じやひじやお願いします!」

ツナは霖之助と握手をした。

そして霖之助は靈夢の方を向き直した。

「で、今日は何の用だい?」

「ツナに合つ服が欲しいわ、それと……」

そう言って靈夢は服からある物を取り出した。  
それは鎖に通された壊れた指輪だった。

「それは!」

ツナが驚愕した、何時の間に取られたのかと……。

「アンタが寝た時に取ったのよ、壊れたままじゃ駄目だと思つたか

「…………ありがとう」

ツナは靈夢に感謝した。

それは未来での戦いで命を落しかけたのを救つたリングだからだ。  
素直に感謝された靈夢は顔を少し赤くした。

「…………別に」

霖之助も素直に驚いていた、あの鉄面皮である靈夢が顔を赤くした  
と証ひの事実にだ。

「（くえ、靈夢が顔を赤くするなんて……）」

霖之助はそれに少しだけ嬉しそうだった。

靈夢が周りからどんな扱いをされているかを知つてゐるからだ。

「じゃあ」の指輪を直せばいいんだね

やつぱりヒカルから指輪を受け取る。

「…………JRの指輪は……」

霖之助はそれを持った瞬間少し考へ、ある部屋に立てこもつた。

「すぐ終るから、本でも読んで待つてるとこわ

そつと置いて靈夢はすぐ近くにある本棚に手を伸ばし本をとつた。  
ツナも本を取つた。

「あ、これ最新刊だ！」

ツナは漫画を夢中で読み始めた。

1時間近く一人は読んでいた。

「…………終ったよ」

霖之助は部屋から出てきた。

持つてゐる指輪は完全に修復されていた。

「元璧に直ってるーー！」

「ああ、ちやんと直したからね」

そう言つて、霖之助はリングをツナに渡す。

それを返してもらつたツナはそのリングを靈夢に渡した。

「…………何のつもり？」

「えつと、家に泊めさせてくれたから…………その御禮で

「…………まあいいわ、貰つておくれわ」

そのリングを指に通す靈夢…………。

「じゃあね、霖之助さん」

「えー？ お金必要じゃないのー？」

「いや、いこんだよ。あの指輪を見たからね」

そう言つて、靈夢とシナは香霖堂から去つてこつた。  
その後姿を見ていた霖之助は……、

「…………君なり、靈夢を変えられるかもしけない…………」

そう呟いた。

「…………わてとい、」

霖之助は店の中に入りある部屋に行く…………。

「…………作つてみようか」

その部屋には橙、赤、青、藍、黄、紫、緑の石があった。

「…………それでさつきの力は何？」

博麗神社に帰ってきた靈夢とツナ。

靈夢は早速ツナに死ぬ気の炎の事を聞こうとした。

「…………今言わなくとも…………」

「今言になさい」

訂正、聞き出していた。

そしてツナは話せるだけ話した。

「へえ～、生命エネルギーを炎にして放出するね～」

それを聞いて靈夢はツナに手を差し出した。

「取り合えずその薬らへり渡しなさい」

「便利じやない、それ」

「いや危険だよー！」

「いいから渡しなさいーー！」

この後3時間に渡るいい争いの結果、5つの死ぬ氣丸は靈夢の手に渡った。

## 人里

博麗神社に七色の光が輝いた。

その光が収まるとき、空に浮いている靈夢が居た。

「」こんな感じよ」

「無理だつて……」

二人がやっているのは単純な靈力の運用法の練習だ。

「まあアレはまだアンタには早いからこれ位で良いわ

」そつ言つて人差し指に薄い青色の弾を作つた。

「それと空飛ぶ練習もしておきなさいね~」

「ちょ、待つ……」

そつ言つて靈夢は神社の中に戻つていった。

俺は結局自由な靈夢を止める事は出来なかつた。

「全く……」

文句を言いながらもしつかりと取り組む。

「イメージが大事……」

靈力の使用はイメージが重要、靈夢曰く『自分の体の中にある栓を外す感じよ、それさえ出来れば後は勝手につかえるわ』だ。山本や獄寺君よりは分かり易い説明の仕方だけど……。

「栓…………栓…………コレかな？」

イメージの中で何か説明は出来ないけど体の中にある栓みたいなものがあるのが分かった。  
それを外すと……。

「うわッ！－！」

体がいきなり熱くなる…………ッ－！  
何かが満ちていく感じがする、これが靈力…………。

「…………手に集める…………イメージ」

右手の人差し指に集中し集めて…………作る。

「…………出来た」

息を吐く、そして吸う。

一気に来た疲労を少しだけ休める…………そしてそれを放つ…………！  
それは一直線に進み木に当たる、木の表面が爆発し霧散する。

「…………靈夢がやつたようにはいかないな」

靈夢が先ほど撃った靈力の技、夢想封印をやつた場所は更地に変わっていた。

「次は……空を飛ぶ方法か……」

イクスグローブのように靈力を噴射する、これはいとも簡単に出来た。

恐らくだが次も簡単に出来るだろ？。

「後は

目を開けると一番最初に靈夢の顔が入った。

「…………おはよっ」

「おはようじゅ無いわ、アンタ何したのよ」

そう言つて靈夢は俺の目を見て外を指差した。  
靈夢が指差した場所は小さいながらもクレーターが七つ程出来ていた。

「少し新技を・・・・・」

「どんな技なのよー。」

「靈夢が少し怒鳴った、少し怖かつたけど・・・

「・・・いや、失敗したから技じゃないよ、多分出来ないと想ひつ」

流石にあれは自信が無い、イクス・バーナーと違つて完成できるといつた感じがしない。

流石に靈力覚えたての俺が使えるようなら苦労はしないよ・・・。

俺には才能が無いから、駄目ツナだから・・・。

「・・・まあ良いわ、出かけるわよ」

靈夢は唐突にものを言う、リボーンにみたいだ。

だけどリボーンとは違う、リボーンは無茶苦茶だし、遊び感覚で無理難題な事を言つてくる。

だけど俺を信じてくれている。

靈夢は素っ気ない態度だけど優しい。

基本的な事も教えてくれた。

ただ靈夢は何故か知らないけど恐れている。

そして今、その無意識的な恐怖が表れている。

超直感をもつてなきや分からぬ位小さかつたけど・・・それが一番表れている。

「・・・何処に?」

靈夢が恐れるような場所・・・。

「人里よ

その時、靈夢の肩が少しだけ震えていたように見えた。

「少し古くさいな」

それが人里の第一印象だった。

明治時代のような町並みで夜が近付いていた為か人は少なかった。  
そしてそれ以上に嫌な感じがする。

「そうね、外の世界の人もそう言つわ」

靈夢は俺が言つた言葉にそう付け加える。

「ごめん、気を悪くした？」

「ううん、別に」

靈夢は何も関心を持たなかつた、ただ少しでもここから立ち去りたいとそういう感じだつた。

「……で、何をすれば良いの？」

## 「買物」

そつぱつ て靈夢は服の中から袋を取り出した。

「 そろそろ食料がきれただったからね

そつぱつ て靈夢は近くの駄菴に行きお金を出し、そのまま物を持ち去つた。

「 良いの一アレドー。」

「 ..... いいのよ」

靈夢の声が少しだけ震えていた。

それに嫌な視線を感じる、後ろから ..... そつ思いながら後ろを見た。

「 ..... 」

ああ、なるほど ..... 。

そつこうわけか ..... 。

「 瞬、先帰つて良こよ ..... 僕が置つかひ」

「 ..... 別に良いわよ」

「 こや、ここ俺こまへて」

そつぱつ て靈夢を帰らせるが如くしたよつて心が靈夢へさりげなく見えた。

「…………取り合えず買つて帰ろつ

」「これはあまり居たくない。

ツナ晩御飯を食べ終わり外に出でていた。  
やる事は唯一つ、靈力を使つた修行だ。  
といつても簡単な事しか出来ない、指先に集めて放つ、空を飛びながら弾幕を張る。  
その繰り返しだつた。ツナは靈夢がやつた事を真似しているだけに過ぎない。

「…………何で先に私を帰させたの？」

靈夢が外に出てきてそんな事を言つた。

「…………靈夢つてさ、人里の人達に恐れられてるよね

「…………どうしてそつ断言するのよ

靈夢がツナを変な物を見るような目で見ていた。

「他人達は靈夢を化物を見るような目だったから」

あの時の靈夢を見る田は完全に同じ人間を見る田じゃなかつた。

「そりや そりに決まつてゐるぢゃない、人と妖怪、どちらの立場にもなる、場合によつては人を裁く事にもなるからね」

「そりだね」

ツナもそれを肯定する。

「そして靈夢は人を恐れている・・・」

ツナがそう言つた瞬間、周囲の空気が変わつた。

「誰が恐れてるつて？」

発生源は靈夢だつた、明らかにその声は酷く恐ろしく、そして恐怖があつた。

「靈夢だよ」

それを簡単に言つツナ、その声にはいつもおどおどとした感じはなく、見透かしていいるような印象があつた。

普段の駄目ツナの方しか知らない人間は間違いなくツナとは思わないだろ？。

「ふざけんじやないわよ、私がいつ恐れているつていうの？」

「ずっとだよ」

ツナは靈夢に対してもう言つた。

「…………アンタ何者よ」

「非日常に巻き込まれた駄目人間だよ」

「靈夢の質問にツナはそう答えた。

「…………アンタは私が怖くないの？」

靈夢の本心の言葉が出て来た、唇は震え、声も震えていた。  
その質問にツナはちやんと答える。

「怖くないよ、何度も怖い思いをしたから」

ツナはそつ答えた、その辺は恐怖など叶ってなかった。

「…………」

「…………ハハハ」

ツナと靈夢、二人は見詰め合っている。  
正確には靈夢はがツナを涙目で睨み付けており、ツナがそれに苦笑  
いをしていた。

「お願い！…もう一回だけ！…もう一回だけで良いから…」

「…………でもこれで三十回目なんだけど…………」

二人がやっているのは将棋だ。

ただ将棋版が無い為、平らな岩に筆で描き手ごろな口を見つけてそ  
れに字を書いて即席の将棋になっているのだ。

ただ靈夢は一回もツナに勝てていないのだ。

毎回毎回即効で片付けられる、ツナも少し手加減したりしているの  
だが毎回勝つてしまう。

そしてツナはわざと負けようとするが勘が鋭い靈夢は「本気でやり  
なさい！…」と意のままなので結局勝つてしまう。

靈夢も勘は鋭いがツナの場合はそれの一身上を行く超直感、はなか  
ら勝負になどなりはしない。

「……そろそろお腹だから片付けて食べない？」

ツナが神社の中にある古臭い時計を見ながら靈夢にそう言った。

「……分かつたわよ」

そう言って靈夢は神社の中に入り料理を作る。

「……わひとつ」

ツナは右手に靈力をを集め指先に集中、そして拳銃のように放つ。それは木を貫通し30メートルくらいのところで爆発した。

「凄い威力になつたな……」

力の使い方が分かつてきたのか嬉しそうなツナ、そして神社から出てきた靈夢が「何事ツ！？」と言つてる。

この後ツナは靈夢を鎮めるのに苦労したのは言つまでも無い。

「アンタさあ、自分がどれくらいの力持つてるか知らないの？」

「…………」靈夢が昼食をほおばりながらツナにせつ話す。

「…………いや、俺は駄目ツナだから……あんなのは誰だつて

「出来ないわよ……それにアンタが駄目だつたら人里の人間はどうなるのよ……」ツナしか残つてないじゃない……」

ツナの駄目宣言に靈夢が反論する。

「え、アレくらい誰でも」

「私はともかく普通は出来ないわ、靈力の素養とかもあるし。私は少しだけ劣るけど保有靈力なんて馬鹿げてるし……」

馬鹿げてる、靈夢はそう言つた。

ツナにとっては信じられなかつた、自分に才能があります、なんて誰も信じられないだろ？

「まあ死に掛けたりすれば結構上がるけど、最初の保有靈力量も調べてみたらかなりあつたわよ」

「…………死ぬ氣弾が原因か…………」

ツナは少し頃垂れる……。

「まあアンタには元から才能があつたんだから良いじゃない、駄目じゃないわ」

「…………ありがとう」

「どういたしまして、じゃあ昼食食べ終わったら幻想郷のルールを教えてあげるわ」

靈夢はやつ言い、お茶を口に含んだ直後、神社の外から轟音が響いた。

そのせいで靈夢は口に含んでいたお茶を全てツナの顔にかけた。

「なに……？」

「あつづ……！」

靈夢は外に飛び出した。

「よお靈夢」

そこには居たのは白黒の服を着た靈夢より小さい少女が居た。

「魔理沙じゃない、何のよつ？」

靈夢は少女、魔理沙にそう言つ。

「博麗神社に居候している外来人を見に来たんだぜ」

「やついう事

「…………靈夢、何があつたの？」

ツナは手ぬぐいで顔を拭きながら神社から現れた。

「へえ、お前が外来人か？」

魔理沙はツナをジロジロと見た。

「なんかヒヨロッちいな、後駄目っぽい」

「初対面で酷い事言われた！！」

ツナは魔理沙に言われた事をつつこんだ。  
魔理沙はツナにつっこまれたことに驚き…………、

「……よし、つっこみだぜーーー。」

「何が！？！」

「いやー、最近面白い奴居なくてわあ、ようやく面白い奴見つける  
ことが出来たぜ！？」

魔理沙は退屈のようであった。

「ハハハ……あ、君名前は？俺は沢田綱吉」

「霧雨魔理沙だぜ」

二人は互いに自己紹介をし、魔理沙は靈夢を見た。

「じゃあ久々にやるぜ、弾幕ごつい」

「そうね、ツナ、そちら辺に居なさい」

「じゃあ見てなさい、これが幻想郷のルールよ」

靈夢はそつとツナを安全な場所に座らせる。

「ツナが呟いた、まさにその一言だつた。

相手を殺さない程度の力、そして特殊なルール、それを決める為の  
争い。

ツナにとっては憧れだった。

「綺麗だ」

「靈符「夢想封印」！」

靈夢の一撃が魔理沙に当たる。  
これで決着。

「また負けちまつたぜ」

魔理沙は悔しそうにそう言った。

「まあ負けないように戦つたからね」

靈巒集

「うん」

「靈夢はツナのスペルカードを作っていた。  
魔理沙の勝負でツナもスペルカードを作りたい、 そう言つたので作  
つていた。」

「アンタの場合は死ぬ氣の炎があるから大丈夫だろ? けど…………」

「大丈夫、 やつてみせるから」

ツナは一枚のカードに炎を込める。  
そのカードにはこう書かれていた。

超炎「イクスバーナー」

「…………まだ時間がかかるかな～？」

暗い場所、そこで喋っているのはたった一人。

「君とは決着をつけないとね、綱吉君」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8635y/>

東方炎貝時 ~ The shellfish of the sky.

2011年11月29日21時47分発行